

## カサ・デル・リスコの東洋磁器

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/24942">http://hdl.handle.net/2297/24942</a>

## カサ・デル・リスコの東洋磁器

野上 建紀

はじめに

カサ・デル・リスコ (Casa del Risco) は、メキシコシティのサン・アンヘル (San Ángel) 地区にある (Fig. 2)。その中庭には、陶磁器や貝殻を壁面にはめ込んで装飾を施した噴水が残る (Fig. 1)。18世紀後半に作られたと考えられているが (たばこと塩の博物館 2010, p89)、1930年代になって修復・復元作業が行われた際に、新しい陶磁器が欠落部分に埋め込まれていったという (たばこと塩の博物館 2010, p89)。

この噴水については、かつて三上次男がその著書の中で紹介している (三上 1988, p303-310)。それには、「大小無数の中国陶磁とスペイン陶器・スペイン系陶器それに貝殻を組み合わせて、高さが四メートルもあるバロック風の壁面装飾を作りあげたものである。この壁面ができたのが一七三四年だというから、ここにはめこまれている中国陶磁は、当然それ以前ということになる。」とある。1734年制作の根拠は確認できなかったが、諸説ある内の一つであろう。また、肥前磁器に関する記述は見られない。



Fig. 1 カサ・デル・リスコの噴水

筆者がこの噴水の存在を知ったのは、この三上の記述によるが、実見する機会がこれまでなかった。2006年に初めてメキシコを訪れた際に調査を行う計画を立てたが、この時は日程の都合上、実現しなかった。ただし、メキシコシティの書店で、カサ・デル・リスコの噴水の壁面が掲載された雑誌のバックナンバー (Centro 26, 2006, p48-49) を購入した際、掲載された写真の中にいくつか肥前磁器である可能性をもつ磁器片を発見した。写真だけでは確実に肥前磁器と断定することはできなかったため、実見したいと考えていたが、2009年に再びメキシコに出かけた際にその機会

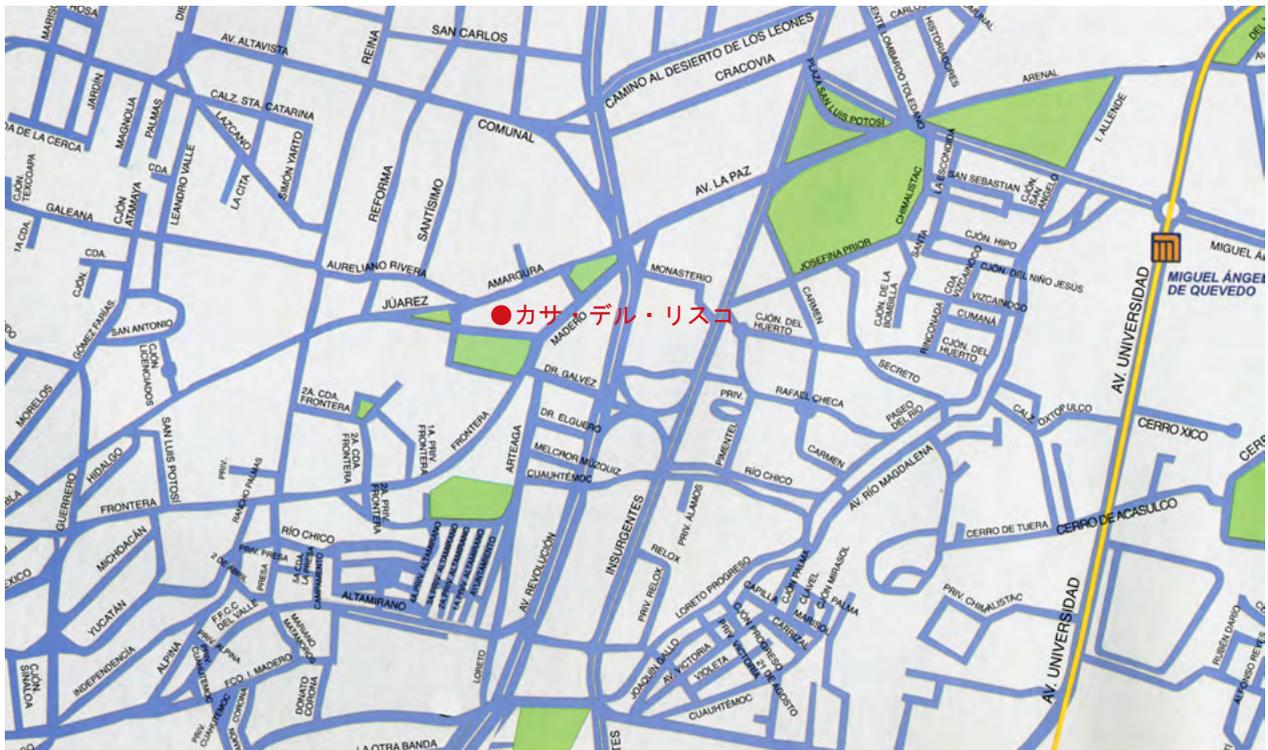


Fig. 2 カサ・デル・リスコ周辺図 (サン・アンヘル地区)

は訪れた。

以下、2009年の時の調査及びそれ以後の検討内容について述べる。

#### 2009年度調査概要

調査日は2009年7月21日、同行者は佐々木達夫、青柳洋治、田中和彦、盧泰康、George Kuwayama、Linda Rosenfeld Pomperであった。

調査方法は、双眼鏡による観察、撮影した写真の観察の二通りである。壁は高く、上部については実際に触れることはもちろん間近で観察することもできない。また、現地の博物館 (Museo de Casa del Risco) で新たに壁面の全体或部分の写真が掲載されている書籍を購入することができたため、その掲載写真の観察も行った。なお、購入した書籍の本文中、中国や日本の磁器片が装飾に使用されていると言及されている。しかし、具体的にどの磁器片が日本製であるのか、示されていない。一方、本書内に明清代の皿 (Platones de la Dinastía Ming y Ching) と説明のある4点の染付皿の内、1点は肥前の製品であった。肥前磁器などの日本磁器と認識されずに、中国磁器と混同されることは珍しくない。メキシコの研究者の間では、ガレオン貿易で中国磁器だけでなく、肥前磁器など日本磁器も運ばれてきたという考えは否定されないし、むしろ一般的に受け入れられているのであるが、中国磁器と肥前磁器の区別が明確にできていないわけではないため、東洋磁器と一括されていることがほとんどである。これはカサ・デル・リスコの陶磁器片に限った話ではない。

#### カサ・デル・リスコの陶磁器の性格

カサ・デル・リスコの噴水の壁面には、東洋磁器、プエブラ陶器 (タラベラ焼) などメキシコ産陶器、ヨーロッパ産陶磁器、貝殻、石の破片が埋め込まれている。全体の構成は概して左右対称である。装飾の主体をなしているものは、東洋磁器とプエブラ陶器である。東洋磁器のほとんどが皿、碗、壺などの器であるのに対し、プエブラ陶器など現地産陶器は器だけでなく、タイルも多く使用されている。壁の下部 (基部) を覆っているタイルはプエブラ陶器である。その他にイギリスなどヨーロッパ産の陶磁器が見られる。そして、それら陶磁器の間を埋めるように貝殻をは



Fig. 3 カサ・デル・リスコ古写真 (1934)  
(Courtesy: Museo Casa del Risco)



Fig. 4 カサ・デル・リスコ噴水壁面上部 (筆者撮影)

め込んでいる。その際、光沢ある貝殻の内面が見えるように壁に埋め込まれている。

現在の噴水の壁面は最初に建設された時の姿をそのまま残しているわけではない。1930年代の修復で欠落部分に新しい陶磁器が埋め込まれたとされていることは前に述べたとおりであり、1930年代の修復以外にも小規模な修復は行われた可能性がある。そのため、陶磁器の年代から壁の制作年代を推定することは難しく、どの程度、修復前の制作当時の形状を保っているか、見極める必要がある。

まず1934年にインドロ・ファベラと夫人ホセフィーナが暮らしていた頃のカサ・デル・リスコの噴水の写真をみよ (Fig. 3)。モノクロの写真であり、壁面の皿が遺存しているのか、その痕跡だけが残っているのか、判別が難しいが、壁面の下部の破損が著しいことはわかる。現在の壁の基壇はなく、壁面の両側に配置されているプエブラ陶器の大壺もない。その部分は空洞となっている。さらにその周囲は壁そのものが剥

落しているようである。この周囲に配置されている陶磁器は1930年代以降の修復で加えられたものようである。一方、壁面の上部は比較的遺存状態が良好なように見える。また、アーチ形の上部を支える両側の柱の中間部に置かれている東洋磁器の壺は写真の中にも確認することができる。

次に1934年の写真で比較的遺存状態がよいと思われた壁面上部の現在の状態を観察してみる (Fig. 4)。東洋磁器の中皿や大皿がよく残っている部分であるが、それぞれの皿は形がよく残っていても割れていたり、一部欠けたものが多い。意図的に割って使用したとは考えにくいので、割れたものを再利用したと考えられる。Fig. 8-aなどは欠けた部分を補うために埋め込んでいる破片もまた18世紀前半以前のものを使用しているので、これらは修復前の姿に近いものであろう。

次に1934年の写真で壁が欠落している部分の現在の状態をみってみる。そこには全く欠けていない東洋磁器やヨーロッパ陶磁器もある。陶磁器の年代も比較的新しいものであるが、割れたものを再利用しているのではなく、壁面の装飾のために完形品を準備している。

それらの多くはかすがい状の金具で壁面に固定されており、壁面上部の陶磁器の固定方法とは異なる<sup>(註1)</sup>。しかもその配置は種類も大きさも完全に左右対象である (Fig. 5)。もちろん壁面の上部であっても左右対称になるように意識して配置されているが、割れたものを再利用しているため、同じ種類とまではいかない。おそらくこうした完形品を完全に左右対称に配置しているものについては、後世の修復時に埋め込まれたものである可能性が考えられる。

一方、プエブラ陶器の完形の皿は壁面の両袖を含めた下部、そして、上部のアーチ状の縁に沿って配置されている。いくつかの例外を除き、同種のを左右対称に配置している。ただし、プエブラ陶器の場合は生産地が近いため、入手しやすいことから、制作当初も壊れたものを再利用するのではなく、完形品を使用した可能性もあり、入手が限られていた東洋磁器と同様に考えることはできない。

壺類については、写真の観察で述べたとおりである。碗類については、オリジナル部分と修復部分がわかりにくい、同一種類あるいは同一文様のものが数多くあるものについては制作時あるいは修復時に一度に埋



Fig. 5 カサ・デル・リスコ噴水壁面全景

完全に左右対称の皿を抽出した。黒丸は東洋陶磁及びヨーロッパ陶磁器、赤丸は現地産の皿を示す。青色部分は1934年の写真から破損が著しいと推定される範囲を示す。

め込まれた可能性が高い。例えば壁面中央部の貝殻の意匠の両脇に配置されている数本の柱は、その多くが色絵で唐人婦人が描かれた同一文様の碗でつくられている。制作あるいは修復のために大量に持ち込まれたのではないかと推測する。1934年の写真にはこの柱はよく残っているように見えるため、1930年代の修復以前のものである可能性が高いが、最初の建設時のものかどうかは検討を要する。

### 壁面装飾の東洋磁器

壁面にはめ込まれている東洋磁器は、中国磁器と日本磁器である。数的には前者が圧倒的に多い。以下、壁面に使用された東洋磁器について、中国磁器と日本磁器に分けて説明したいが、修復時に新しく加えられた可能性があるものについては今回省略することにする。

#### 1) 中国磁器

装飾壁面の中で大きな割合を占めている中国磁器の破片について簡単に説明する。器種は小皿・中皿・大皿などの皿類、チョコレートカップ等の碗類、瓶・壺類などがある。釉などの種類は、染付、白磁、色絵などがある。皿は内面の文様を見せるように貼付け、小片などはモザイク状にタイルとして使用している。また、チョコレートカップなどの碗類は、合わせ口にして積み重ねて、柱状に飾り付けている。そして、完形に近い壺をいくつか台上に配置している。

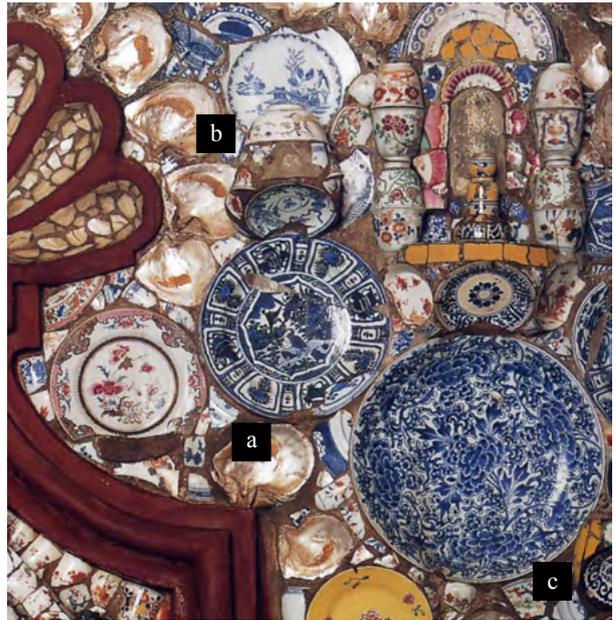


Fig. 6 カサ・デル・リスコ噴水壁面（部分）  
(Courtesy: Museo Casa del Risco)



Fig. 7 カサ・デル・リスコ噴水壁面（部分）  
(筆者撮影)



Fig. 8 カサ・デル・リスコ噴水壁面（部分）  
(Courtesy: Museo Casa del Risco)



Fig. 9 カサ・デル・リスコ噴水壁面（部分）  
(筆者撮影)

[16 世紀後半～17 世紀前半]

Fig. 6-a は 16 世紀後半～17 世紀前半の景德鎮窯の染付芙蓉手皿である。いわゆるカラックウェアとよばれるものである。Fig. 7-a も景德鎮窯の染付芙蓉手皿である。見込みには宝文を描く。類例は Museo Nacional de Historia, Mexico city のコレクション (Kuwayama, 1997, p37) に見られる。Fig. 8-a は染付麒麟文芙蓉手瓶である。類例は Museo Franz Mayer, Mexico city のコレクション (Kuwayama, 1997, p32-33) に見られる。Fig. 9-a は 17 世紀前半の染付大皿である。芙蓉手皿の一種で内側面の区画内にチューリップデザインを施す。

[17 世紀後半～18 世紀]

Fig. 10-a, b は 17 世紀後半～18 世紀前半の景德鎮窯の折縁皿である。見込みには花籠文が描かれている。Fig. 11-a は染付草花文皿である。内側面の区画

の中にアザミ状の花を描き、見込みには花文の周囲を渦巻き文で埋めている。Fig. 16-b は同様の文様の染付チョコレートカップである。同種の文様の製品はメキシコシティのテンプロマヨール遺跡から出土している (Kuwayama, 1997, p72)。Fig. 12-a は 17 世紀末～18 世紀前半の染付芙蓉手皿である。見込みには鞠挟み文の中に草花文が描かれている。ベトナム沖で 18 世紀前半にカマウ Ca Mau 沖で沈んだ船の積荷の中に類似したものが発見されている。Fig. 13-a は染付皿である。1745 年に沈んだスウェーデン東インド会社船のヨーテボリ号 (The Götheborg) から引揚げられた染付皿に同じ技法や装飾が見られる。Fig. 14-a は染付皿である。折縁にして縁に花卉文を配し、内側面は四方禪文あるいは七宝繋ぎ文を地文とした窓絵とし、見込みには花卉文を入れる。1752 年に沈んだオランダ船ヘルデルマルセン号 (The Geldermalsen) やヨーテボリ号の積荷の中に類似した特徴をもつ製品



Fig. 10 カサ・デル・リスコ噴水壁面 (部分)  
(筆者撮影)



Fig. 11 カサ・デル・リスコ噴水壁面 (部分)  
(Courtesy: Museo Casa del Risco)



Fig. 12 カサ・デル・リスコ噴水壁面 (部分)  
(筆者撮影)



Fig. 13 カサ・デル・リスコ噴水壁面 (部分)  
(筆者撮影)



Fig. 14 カサ・デル・リスコ噴水壁面（部分）  
（筆者撮影）



Fig. 15 カサ・デル・リスコ噴水壁面（部分）  
（Courtesy: Museo Casa del Risco）



Fig. 16 カサ・デル・リスコ噴水壁面（部分）  
（Courtesy: Museo Casa del Risco）



Fig. 17 カサ・デル・リスコ噴水壁面（部分）  
（Courtesy: Museo Casa del Risco）

が発見されている。Fig. 6-b は染付山水楼門文皿である。見込み文様などはヘルデルマルセン号の引き揚げ遺物に類例が見られる。Figs. 6-c, 9-b は染付唐草文皿である。インドネシアのバンテン遺跡で同種の文様の皿が発見されている。また、サダナ Sadana 島沖沈没船から同種の文様が崩れた皿が発見されている。Fig. 15-a, b は 18 世紀のチャイニーズイマリである。Fig. 16-a は 18 世紀の粉彩、いわゆるファミリー・ローズである。花卉に唐草を組み合わせた同様の文様は、トプカブ宮殿のコレクションの大皿（西田 1983, p236）に見られる。

#### [18 世紀後半～19 世紀]

Fig. 14-b, 17-a は 18 世紀後半～19 世紀前半の徳化窯系の型作りによる染付碗である。

#### 2) 肥前磁器

肥前磁器が装飾壁面の中で占める割合は大きくない。年代は 17 世紀後半から 18 世紀前半にかけての

製品にはほぼ限られている。また、生産窯はいずれも有田であり、内山地区の窯の製品がほとんどである。器種は中皿、大皿、壺、碗蓋などがある。釉などの種類は染付、色絵（金欄手）などがある。装飾に用いられる方法は中国磁器と同様である。

#### [17 世紀後半]

Fig. 9-c, 19-a は 17 世紀後半の染付花虫文芙蓉手皿である。マニラ・ガレオン貿易で運ばれた肥前磁器の中で最も一般的な製品のひとつである。マニラでも数多く発見されているし、メキシコシティはもちろんグアテマラでも発見されている。Figs. 20-a, 21-a は染付山水文皿である。類例は Museo Nacional del Virreinato, Mexico City のコレクション（Kuwayama 1997, p44-45）に見られる。Fig. 21-b は染付菊花文壺である。年代は 17 世紀後半、有田窯で焼かれたものである。壁面には中国磁器の壺と対をなすように配置されている。肥前磁器の壺に関しては、フィリピンのミンダナオ島で発見されている他、

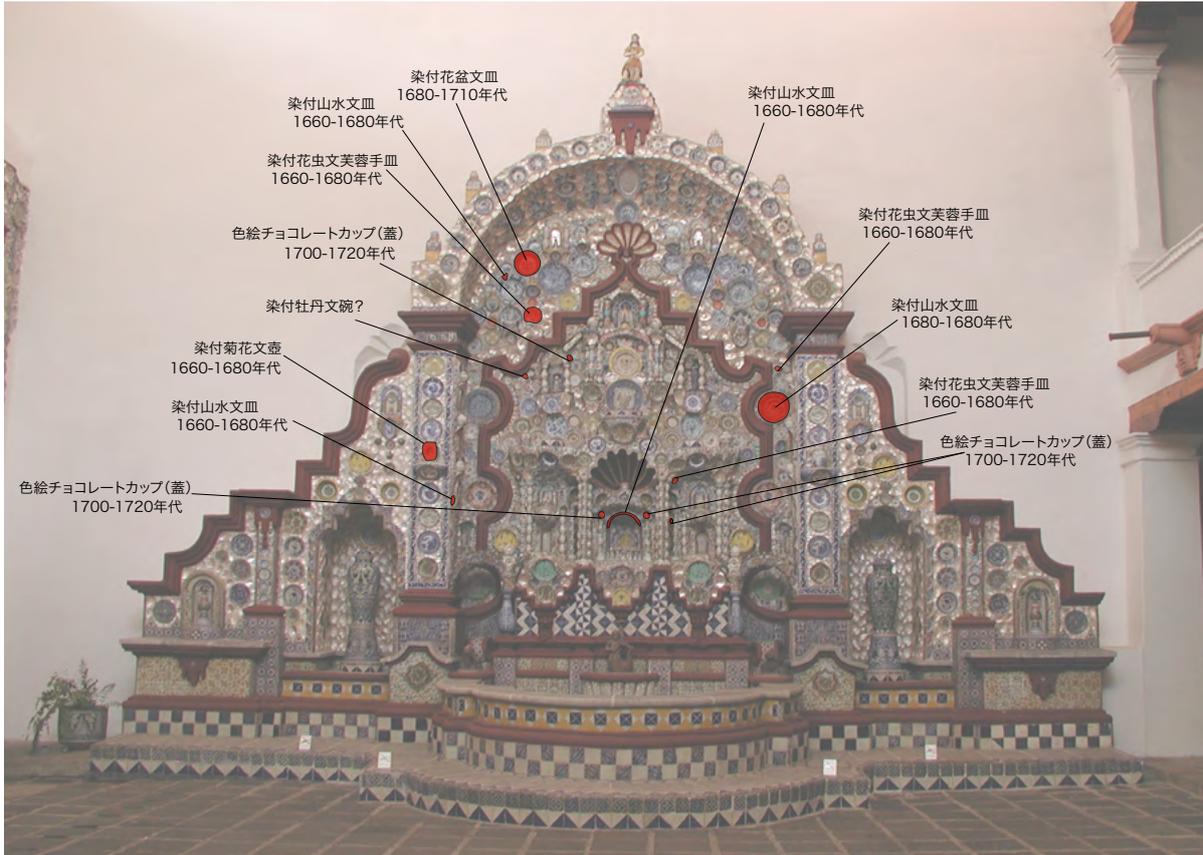


Fig. 18 カサ・デル・リスコ噴水壁面の肥前磁器



Fig. 19 カサ・デル・リスコ噴水壁面 (部分)  
(Courtesy: Museo Casa del Risco)



Fig. 20 カサ・デル・リスコ噴水壁面 (部分)  
(Courtesy: Museo Casa del Risco)



Fig. 21 カサ・デル・リスコ噴水壁面 (部分)  
(Courtesy: Museo Casa del Risco)



Fig. 22 カサ・デル・リスコ噴水壁面（部分）  
（筆者撮影）

南米のペルーの伝世品の中にも見られる。ガレオン貿易で一定量の壺が運ばれていたことを推測させる。Fig. 22-a は染付芙蓉手皿である。見込みは Museo Nacional del Virreinato, Mexico City のコレクション (Kuwayama1997, p44-45) に見られる山水文に似る。

[17 世紀末～18 世紀前半]

Fig. 9-d は 1680～1710 年代の染付花盆文芙蓉手皿である。Fig. 23-a, b は 1700～1740 年代の色絵チョコレートカップの蓋である。肥前のチョコレートカップは、ラテンアメリカではメキシコシティ、オアハカ、グアテマラ、キューバなどで出土している (野上 2009)。すなわち、これまでラテンアメリカで肥前磁器の出土が確認されている地域ではいずれもチョコレートカップが出土しており、染付花虫文芙蓉手皿と並ぶラテンアメリカ向けの肥前磁器の主力輸出製品である。現在、出土が確認されているチョコレートカップの大半は 17 世紀後半のものであるが、メキシコシティでは 18 世紀前半のカップとソーサーが出土している。

その他、壁面の中の金襴手の色絵製品の中に肥前磁器が含まれている可能性があるが、写真ではチャイニーズイマリやヨーロッパ製の模倣伊万里との判別が難しく、今回は抽出を行わなかった。

また、19 世紀以降の古伊万里写しと思われるものも見られる。日本製の可能性があるが、産地は明確ではない。

#### カサ・デル・リスコの東洋磁器の特質

カサ・デル・リスコの噴水の壁面に見られる東洋



Fig. 23 カサ・デル・リスコ噴水壁面（部分）  
（Courtesy: Museo Casa del Risco）

磁器は、メキシコシティなどの出土品やメキシコ国内の博物館の収蔵品の概ねその範疇にある。同種の製品をそれらの中に見出せる例も少なくない。

まずガレオン貿易の開始以前に確実に生産年代がさかのぼる製品は見られない。そして、16 世紀後半から 17 世紀にかけて、肥前磁器も含めて一定量の製品が見られるが、数的には 18 世紀前半から中頃にかけて多くなるように思える。噴水を制作する場合、同時代あるいはそれより少し前の陶磁器を多く使用したと考えるのが妥当であるから、18 世紀中頃から後半にかけて噴水が作られたとする考えと矛盾するものではない。

18 世紀後半以降の製品について見てみると、徳化窯の型作りによる染付碗は多く見られるものの、ダイアナ号 (The Diana) やテクシン (Tek sing) などの 19 世紀前半の沈没船資料で一般的に見られる陶磁器はほとんど確認できない。例えば内側面を梵字で埋めた皿、棘状の花弁と唐草を組み合わせた文様の皿、仙芝祝寿文の碗や皿などはほとんど見ない。また、複数確認されるウィローパターン文様の皿も写真で観察する限り、中国磁器ではないものが多く、少なくとも 19 世紀前半の沈没船に見られるタイプのウィローパターン文様のものは確認できない。同様にイギリスによる 1819 年のシンガポール建設以降の製品が主体とされるプラウ・サイゴン (Pulau Saigon) 遺跡の出土資料と共通するものも少ない。

19 世紀前半の製品が少ないこと自体は、先に述べた噴水の制作年代に矛盾するものではないが、必ずしもそれを積極的に裏付けることにはならない。19 世紀に入ると東洋磁器が減少する傾向はメキシコシ

ティの遺跡の出土状況でも同様に見られるからである。すなわち、噴水の制作年代に関わらず、メキシコシティにもたらされた中国磁器の量そのものが減少した可能性も考えられる。ガレオン貿易の衰退や終焉とも関わりがあるのであろう。あるいはヨーロッパ陶磁器の工業製品がアジアに比べて入りやすい環境にあったことも理由として考えられる。そのため、今後、東洋磁器以外の製品、すなわち、地元のプエブラ陶器やヨーロッパ陶磁器の年代も合わせて検証していく必要があるだろう。

おわりに

今回、実見したとは言え、陶磁器そのものを間近に観察できたわけではない。現地における観察で一部の肥前磁器の抽出を行うことはできたが、多くの検討は撮影した写真の観察によるものであり、十分な観察と言えるものではない。誤認しているものもあると思う。今後、さらに検討していきたいと思う。

註

(1) 18世紀前半以前の陶磁器にも一部金属製かすがいの使用が見られるが、おそらく修復時に再度固定するために使用されたと推測される。

この研究は平成21年度(2009)西田記念東洋陶磁史研究助成(研究代表者:田中和彦)を受けて行った。

引用文献・参考文献

- たばこと塩の博物館 2009『ガレオン船が運んだ友好の夢』たばこと塩の博物館
- 西田宏子 1983「清朝の輸出陶磁-欧米向製品を中心として-」『世界陶磁全集 15 清』小学館, p228-248
- 野上建紀 2009「チョコレートカップの変遷と流通」『金大考古』第64号 金沢大学考古学研究室, p22-30
- 三上次男 1988「メキシコの中国陶磁」『陶磁貿易史研究 南アジア・西アジア篇』三上次男著作集二, 中央公論美術出版, p303-310
- Berit Wästfelt, Bo Gyllensvärd, Jörgen Weibull. 1990. Porcelain from the East Indiaman Götheborg. Wiken..
- Christie's Amsterdam. 1986. The Nanking Cargo Chinese Export Porcelain And European Glass And Stoneware.

- Christie's 1995. The Diana Cargo.
- Carlos Méndez D. 2006. Centro Guia Para Caminantes, 26. p48-49
- George F. Bass (edited). 2005. Beneath the Seven Seas. Thames & Hudson.
- George Kuwayama. 1997. Chinese Ceramic in Colonial Mexico. Los Angeles County Museum of Art.
- Museo Casa del Risco. Don Isidro Fabela y la Casa del Risco
- National Museum of the Philippines. 1996. Treasures of the San Diego.
- Nagel Auctions. 2000. Nagel Auctions Tek Sing Treasures.
- Nguyen Dinh Chien. 2002. Tau Co Ca Mau, The Ca Mau Shipwreck 1723-1735.
- Virginia Armella de Aspe.. Notas sobre San Angel. Don Isidro Fabela y la Casa del Risco. p45-73
- (e-mail: takenori\_n@hotmail.com)